

LIZA MINNELLI - JOEL GREY
INVITE YOU TO
COME TO THE

キャバレー
CABARET



キャバレー
CABARET
カラー作品



スタッフ

製　　作……………………………サイ・フューアー
監　　督……………………………ボブ・フォッシー
脚　　色………………ジェイ・プレッソン・アレン
　　　　　　　　　　　　ヒュー・ホイーラー
原　　作……ジョー・マステロフ作ミュージカル劇「キャバレー」及びジョン・バン・ドルーテン作舞台劇「私はカメラ」並びにクリストファー・イシャーウッド作ストーリー集による
ニューヨーク・ステージ演出…ハロルド・プリンス
音　　楽……………………………ジョン・カンダー
歌　　詞……………………………フレッド・エッブ
音楽監督並びに編曲………………ラルフ・バーンズ
撮　　影………………ジョフリー・アンスワース
美術監督…………………………ユルゲン・キーバック
衣裳デザイナー…………シャーロット・フレミング
メーキャップ並びにヘア・スタイル
……………………レイマンド・スタングル
　　　　　　　　　　　　スージー・クラウス
ライザ・ミネリのヘア・スタイル…ガス・ル・プレ

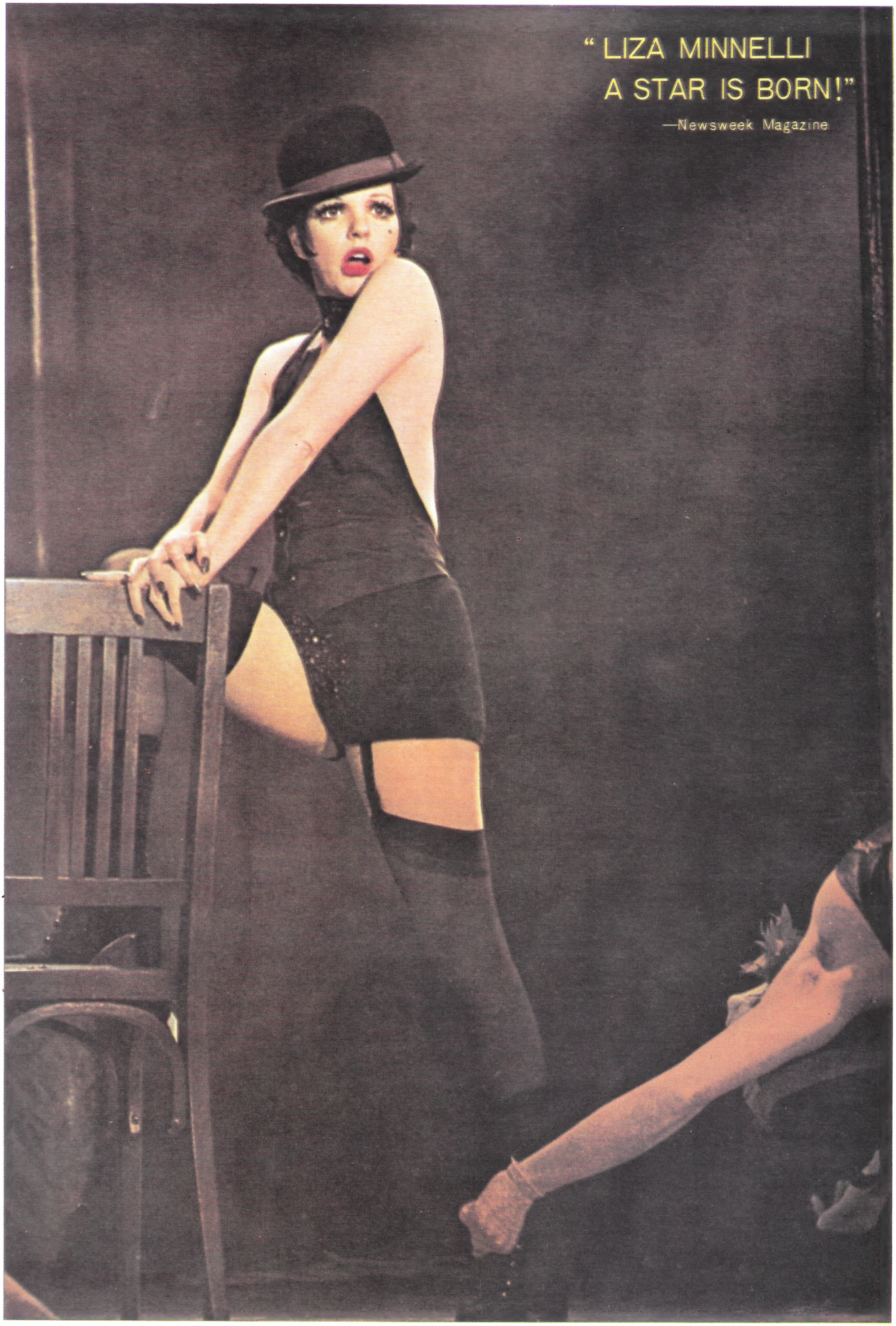
キャスト

サリー・ボールズ……………………ライザ・ミネリ
ブライアン・ロバーツ……………マイケル・ヨーク
マクシミリアン・フォン・ヒューネ
………………………ヘルムート・グリーム
MC………………………………ジョエル・グレイ
フリッツ・ベンデル…………フリッツ・ベッパー
ナタリア・ランドーア…………マリサ・ベレンソン
フロイライン・シュナイダー
……エリザベート・ニューマン=ビアテル
フロイライン・コスト……………………ヘレン・ビタ
フロイライン・マイア
……シーグリード・フォン・リヒトーフェン

サントラ盤プローブ・レコード〈東芝〉

ABC映画

フォックス映画提供 20 CENTURY-FOX


"LIZA MINNELLI
A STAR IS BORN!"
—Newsweek Magazine



＊かいせつ

リズ，オードリー以来たえて久しかったスーパー・スターの誕生！

これがミュージカル・ドラマ『キャバレー』の最大の見どころである。その名はライザ・ミネリ。すでに本年度のアカデミー賞の呼び声も高い。

1930年頃のベルリンを背景に，ショウの世界に生きる若い娘と，やはり若い学者の卵であるエトランゼの孤独な，やるせない恋の時を描いた感動的な作品である。

ジョー・マステロフ原作のブロードウェイのヒット・ミュージカル「キャバレー」と，ジョン・バン・ドルーテン作のステージ・プレイ「私はカメラ」並びにクリストファー・イシャーウッド作のストーリー集に基いて「ミス・ブロディーの青春」のジェイ・プレッソン・アレンがヒュー・ホイーラーと共同で脚色にあたったもの。

監督は舞台の実績をひっさげて映画化もされた「スイート・チャリティー」で，その鮮烈な感覚が高く評価されたボブ・フォッシーで，今度はさらに深い洞察力にみちた演出で単なるミュージカル以上の感銘をあたえる。

製作は「野郎どもと女たち」，「カンカン」でおなじみのサイ・フューアー。ブロードウェイ出身だけにボブ・フォッシーとのコンビはすばらしい。

作曲はジョン・カンダー，歌詞はフレッド・エッブ。とくにこの映画のために新曲をいくつか追加して密度を濃くした。音楽監修は「スイート・チャリティー」のラルフ・バーンズ。

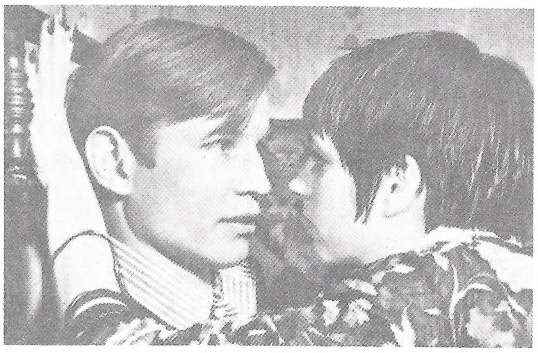
物語の背景となるロケがすばらしい効果をあげているがこれはミュンヘンを主とするドイツ各地で撮影されたものであり，屋内セットでさえ地元のババリア・スタジオで行われた。撮影は「2001年宇宙の旅」の名手ジョフリー・アンスワースである。

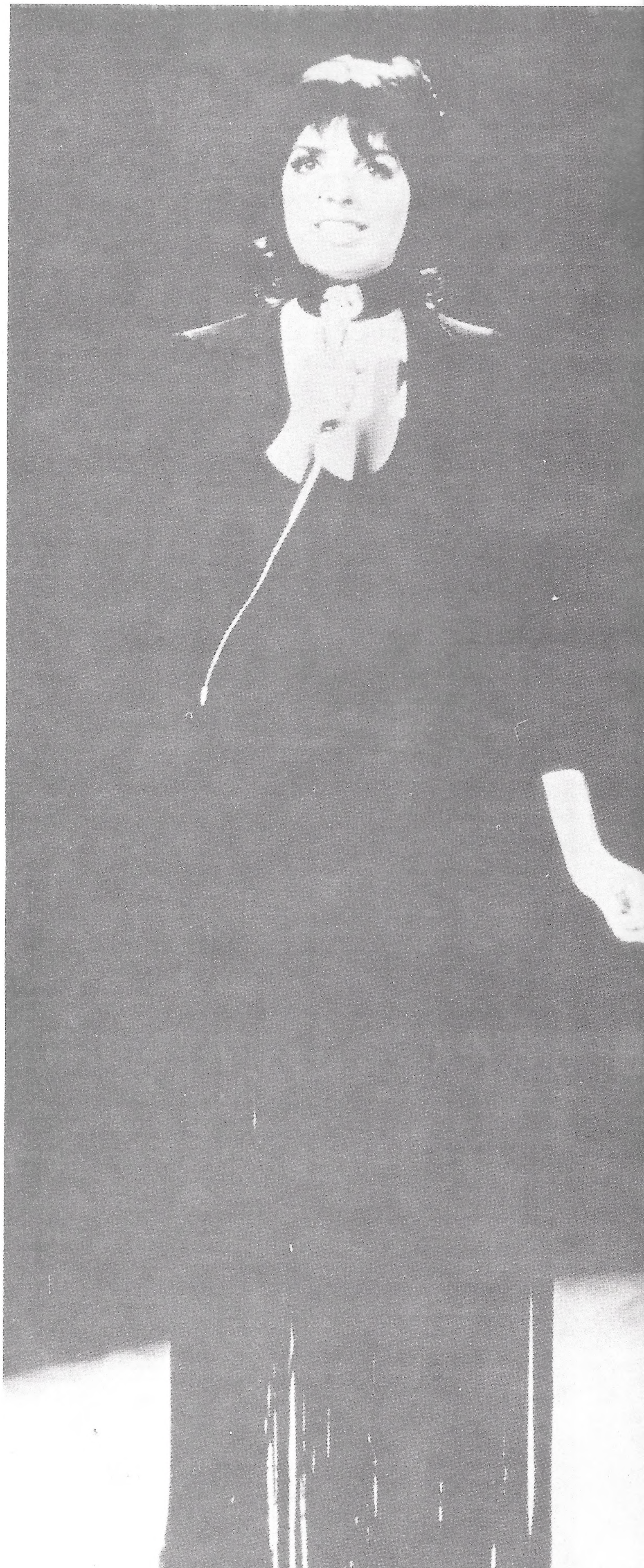
主演は最初に紹介したライザ・ミネリ。「くちづけ」も評判が高かったが，今度の『キャバレー』で彼女はそのダイナミックな魅力のすべてを出し切った。まさにセンセーションでありニューズ・ウィーク誌，ライフ誌はともにカバーにとりあげ，日本でもジャーナリズムは同様のあつかいをした。もちろん日本では『キャバレー』が未公開だというのに。

相手役はこのところ実力，人気充実の英国の若手『ロミオとジュリエット』などのマイケル・ヨーク。MCにふんして卓越した芸人ぶりを見せるのは舞台の『キャバレー』でも絶賛されてトニー賞を獲得したジョエル・グレイ。すばらしいショウ・マン・シップである。以上の主役をたすけてワキはほとんどドイツ出身の実力派スターを並べている。

また，芸人としてはオーストリアやドイツ出身の女性バンドやロンドンの人気者リッキー・ルネーや女レスラー，他さまざまの芸人たちが特別出演して，この映画をより楽しく，より華やかにもり上げている。





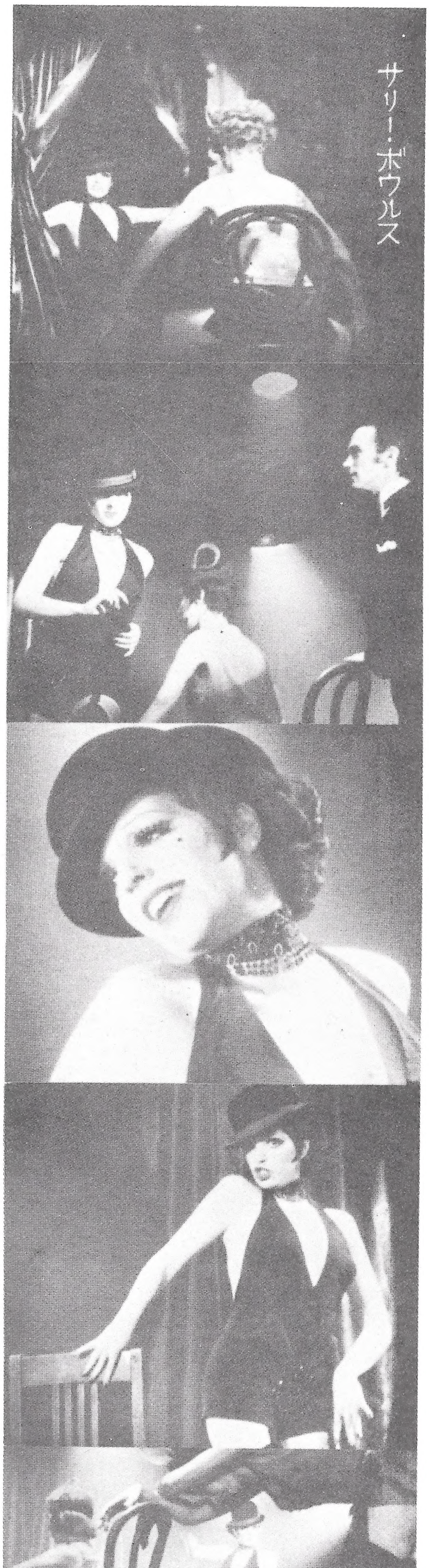


《歌曲》ミュージカル・ナンバー

1. ウィルコメン　WILLKOMMEN
2. 私の愛するあなた　MEIN HERR
3. 女が二人　TWO LADIES
4. こんどはきっと　MAYBE THIS TIME
5. シティング・プリティー　SITING PRETTY
6. ティラー・ガールズ　TILLER GIRLS
7. お金が世界を廻してる　MONEY, MONEY
8. 結婚　HEIRATEN(MARRIED)
9. 彼女を私の目で見られたら IF YOU COULD SEE HER
10. 明日はわれのもの　TOMORROW BELONGS TO ME
11. キャバレー　CABARET
12. フィナーレ　FINALE

サントラ盤／プローブ・レコード〈東芝〉 IPP-80570
ライザ・ミネリ歌『ニュー・フィーリン』『ライブ・イン・パリ』/A&M レコード





サリー・ボウルス

＊ものがたり

ベルリン。1930年初頭。ようやくナチズムが抬頭して来た頃。

小さなキャバレーの舞台ではMC(ジョエル・グレイ)がWILLKOMMENを歌っている。演奏はキット・キャット・クラブのオール・ガール・ジャズ・コンボである。サリー（ライザ・ミネリ）はスター級の芸人である。同じアパートに部屋を探しに来たのはブライアン（マイケル・ヨーク）で，彼はロンドンから来た語学生である。２人は親しくなった。ブライアンはある夜キャバレーへ行った。サリーはMEIN HERR を歌った。店内にはカンパを乞う若いナチ党員がいたがブライアンはひたすらサリーの美しさに見とれていた。

ブライアンはやがてサリーの友人というドイツ人フリッツ（フリッツ・ベッパー）に会い英語をおしえてくれとたのまれた。

ベルリンの街頭ではナチ党員の活動がめだつようになったが，ブライアンはそれに背をむけてサリーとの楽しい時を過した。サリーはブライアンがロマンチックでない，とすねてみせたりした。２人はシャーロッテンバーグ宮殿に行った時，少年合唱隊が歌うTOMORROW BELONGS TO ME をきいて感動した。

ブライアンの英語の生徒に美しいナタリア（マリサ・ベレンソン）が加った。彼女の父は大きな百貨店の持主だった。サリーはナタリアにヤキモチをやいてブライアンとの仲を気まずくしたりした。しかしサリーの父が彼女をかまってくれない淋しさをうったえるとブライアンは彼女を抱いた。こうして２人は恋の炎に身を投げた。

キャバレーでサリーは２人の愛のためにMAYBE THIS TIMEを歌った。

ナタリアはフリッツが求婚した事をサリーにうちあけた。そしてサリーとブライアンの前にも新しい問題が起きた。金持ちでハンサムなマクシミリアン・フォン・ヒューネ男爵（ヘルムート・グリーム）の出現である。サリーはMONEYを歌い，しみじみと金のある事の楽しさを知った。やがて３人の奇妙な友情と歓楽の夜がつづいた。キャバレーでは女の子とMCが TWO LADIESを歌った。

マクシミリアンは２人に豪華な贈り物をし，お城に招待したりした。３人は田舎のビア・ガーデンに寄り給仕たちが歌うTOMORROW BELONGS TO MEをきいた。

サリーは男爵夫人になるチャンスがあるのを知った。しかし，ブライアンもまたマクシミリアンの“恋人”であった。サリーを愛しているブライアンはヤケのように若いナチ党員にケンカを売り散々な目にあわされた。そんなブライアンをサリーはなぐさめた。マ

クシミリアンはアルゼンチンに永住すると電報をよこした。2人は静かに笑った。

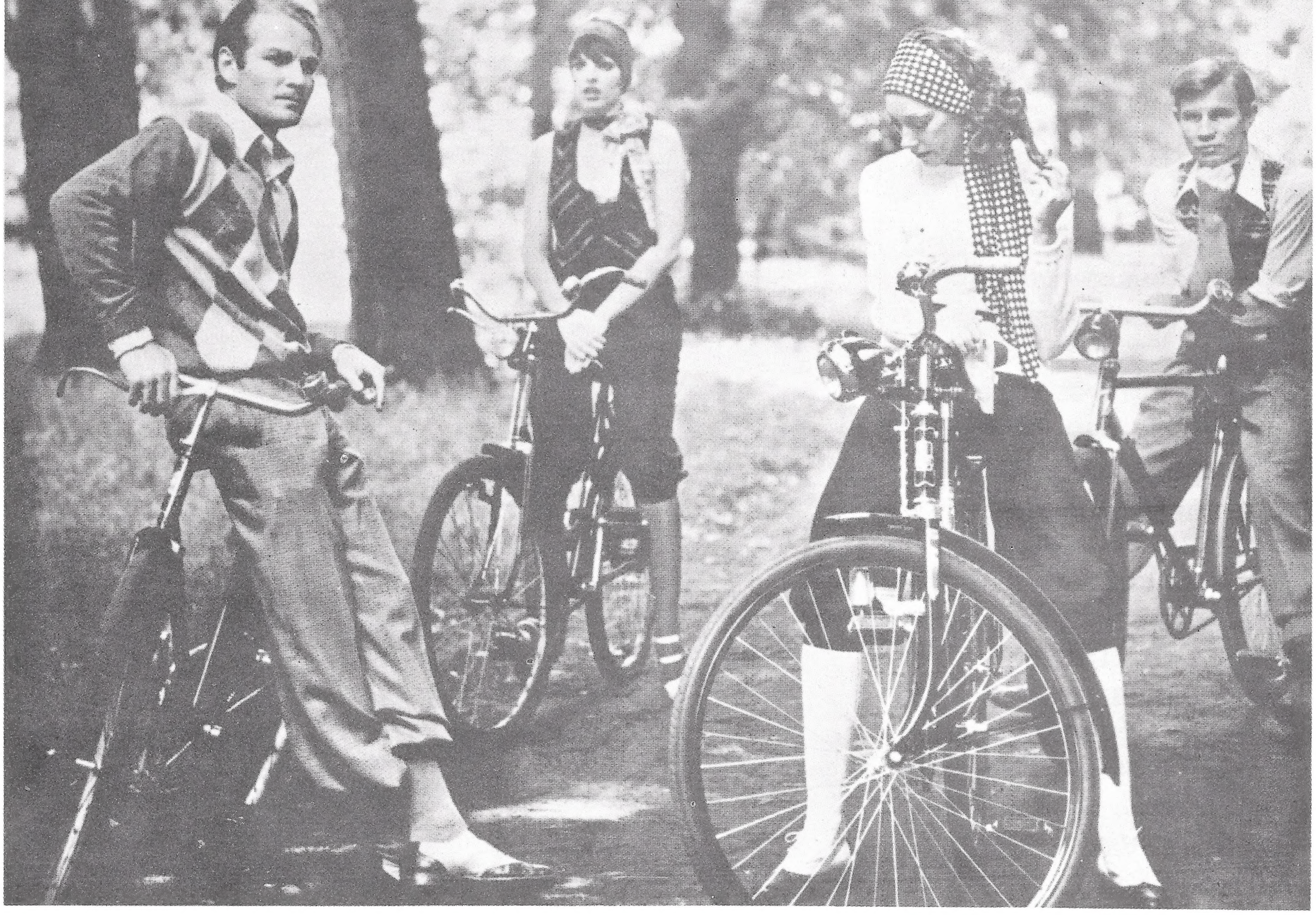
キャバレーではコーラス・ガールたちの歌TOMORROW BELONGS TO MEがいつしか軍隊風に変っていった。

ナタリアとフリッツはお互いがユダヤ人である事を知り結婚した。キャバレーではMCが女の子と IF YOU COULD SEE HERを唄っていた。

サリーは身ごもっていた。ブライアンとの仲もうまく行っていた。しかしサリーは将来を考えると不安であった。そんなある日,キャバレーで,ブライアンは中年の男から電話でさそわれた。それをサリーは見ていた。翌朝かえって来た彼女は毛皮のコートを着てなかった。サリーはそれを売った金で中絶をしたのだった。怒ったブライアンに育児は自分に似合わないと答えた。ブライアンはサリーの傷ついた心を知った。そしてベルリンを去る決心をした。2人の別れは風のようにさわやかだった。人ごみにまぎれて消えてゆくサリーの後姿にブライアンはサリーを本当に愛していた事を知った。

傷心のサリーは今夜も歌う。CABARETである。それはサリーの本心だった。ブライアンが汽車に乗る頃キャバレーはMCがにぎやかにWILLKOMMENを歌っていた。





監督
ボブ・フォッシー
BOB FOSSE



イリノイ州シカゴに芸人の子として生まれた。9歳でダンスを始め，13歳で舞台に立った。

第2次大戦中，海軍所属の劇団に加わり慰問興行に従事した。53年，ハリウッドへ来てMGMと契約し，ダンサーとしてミュージカル映画に出演したが，やがてニューヨークのブロードウェイに進出し，55年に名作「パジャマ・ゲーム」の振付師としてトニー賞を獲得，「くたばれヤンキース」,「町のニューガール」,「レッド・ヘッド」,「スイート・チャリティー」,「努力しないで出世する方法」の振付を手がけ，その中で「レッド・ヘッド」と「スイート・チャリティ」は演出も試みた。

これらのミュージカルはすべて彼の振付で映画化され「スイート・チャリティー」は演出も兼任した。

60年，「くたばれヤンキース」以来彼の作品に出演している名女優グエン・バードンと結婚した。

彼はこう述懐している。

「私はフレッド・アステアやジーン・ケリーのようなダンスの名手になるためにハリウッドへ来た。しかし私は自分の才能に限界を感じてニューヨークで仕事（振付）をする事にした」

彼はその時ミュージカルが本領を発揮するのは舞台であると見きわめたのであった。そしてミュージカルに於て演出・振付など彼が築いた功績は大き



い。しかし，こうも言う。

「映画の可能性は無限であると信じる。限界があるとしたらそれは演出家の頭に，であろう。私は将来もダンスや音楽やパントマイムを織り込んだ動きのある映画を作りたい。セリフは最少限，むしろ無くてもいい。ダンスは環境，雰囲気，特定の場所，人物の性格をあらわすべきであるし，また感情や情緒を表現することも出来，その上に娯楽性と美しさを作品にあたえる。ダンスは見て美しく，感動をあたえるものでなくてはならない」

映画のセットでは絶えず動きまわり，片時もタバコをくわえていない時はない。



ニューヨーク生まれ。父親ハーマン・フューアーは劇場の総支配人であった。ニューヨークの名門ジュリアード音楽学校出身で，リパブリック映画会社に入り，音楽部長となった。

第2次大戦中，応召して陸軍に入り，大尉となった。復員後リパブリックに戻ったが，やがて退社しブロードウェイに進出し，プロデューサー，アーネスト・マーティンと組んで「野郎どもと女たち」,「カンカン」,「努力しないで出世する方法」,「絹の靴下」などミュージカルを続々と舞台にのせ，いずれも大ヒットを記録した。

以上のうち「野郎どもと女たち」は51年，ニューヨーク演劇批評家サークル賞，「努力しないで出世する方法」は62年，再び同じ賞を獲得した。

71年，映画製作に乗り出し，そのデビュー作とし，得意のヒット・ミュージカル「キャバレー」の映画化を手がけることになった。

製作者
サイ・フューアー
CY FEUER

「キャバレー」のよさ，

おもしろさ，



結論をさきにいうと，映画になったブロードウェイ・ミュージカル「キャバレー」は，予想したよりもはるかにおもしろく，舞台から映画化されたミュージカルとして感覚的にも，内容のおもしろさからいっても近来にない快作だとおもう。

これまでに評判になったミュージカル映画の傑作といわれる「ウェスト・サイド物語」「マイ・フェア・レディ」「サウンド・オヴ・ミュージック」などは，なるほど原作の舞台のおもしろさを充分スクリーンに移してはいるが，歌の場面などについて考えると，舞台の演出をそのまま踏襲していて舞台的な感じから抜けきっていないところがいくつかあったようにおもう。また「ウェスト・サイド物語」のナタリー・ウッドや「マイ・フェア・レディ」のオードリー・ヘプバーンのように歌えないスターが本職の歌い手の声をなぞってパクパクやっているとおもうとこれも感心したことではない。

要するにこれまでのハリウッド製のミュージカルは，人工的できれいごとにしすぎているところがあったし，舞台のよさを忠実に伝えるどころか「ペンチャー・ワゴン」式に改悪してしまったものも少なくない。そんなわけで，舞台が本家本元であるミュージカルを映画にする場合に舞台的になるのはやむを得ないという考え方がこれまでの常識をこの「キャバレー」は始めて破っているところがまず気に入ったのである。

「キャバレー」は，クリフトファー・イシャウッドというイギリスの小説家が若い頃ナチス時代になる直前のドイツ，ベルリンで見聞し，体験を基にして書いた短篇小説集「ベルリン物語」のなかの一篇「サリー・ボウルズ」を基にしたアメリカの戯曲を舞台のミュージカルにした「キャバレー」を映画にしたものであるが，映画の作者ボブ・フォッシーは舞台そのものよりもこの作品の素材ドラマを広い視野で捉え，それを彼独自の映画感覚によって表現しようとしたところが先ず映画化成功の第一の鍵となっている。

ボブ・フォッシーという人は舞台のダンサー出身で俳優でもあり，後にコレオグラファー（振付師）としてブロードウェイで評判になった「パジャマ・ゲーム」1954，「くたばれ，ヤンキーズ！」1955，「電話のベルが鳴っている」1956（ジェローム・ロビンスと協同で振付），「町に来た新顔の女」1957それに「努力しないで出世する方法」1961などを振付，あるいは演出も兼ねてブロードウェイの振付師としては，「ウェスト・サイド物語」のジェローム・ロビンスとならぶ実力者といわれていた人であり，映画にも1953年ころからダンサー，振付，俳優としてかなり作品に関係してきている。日本には未公開に終った「キス・ミー・ケイト」1953では振付と出演俳優を兼ね，ドリス・デイの「パジャマ・ゲーム」1957や「くたばれ，ヤンキーズ」1958で振付を担当していたのも彼であった。

一時はフレッド・アステアやジーン・ケリーのような踊るハリウッド・スターを夢みたこともあったという彼は監督を目指して1968年その第1回作品としてシャーリー・マクレインが主演した「スイート・チャリティ」を世におくり出した。このデビュー作もかなりの出来ではあったが，正直いって少々張りきりすぎて堅くなったようなところがないではなかった。

そのフォッシーの第2作がこんどの「キャバレー」であるが，今回は第1作の経験を充分生かしており，この人が生まれ持った映画感覚のよさを思いきり活用してとても舞台出身の人とはおもえぬセンスのよさを作品全体にみ

たのしさ



映画評論家　**野口久光**

せている。

映画というものはもともといくつかのショット(画面)の組合わせ，そのリズム感によって舞台とは全く異った視覚的な美しさ，ドラマティックな緊張を感じさせるものであるが，フォッシーはある意味では古く，しかも映画に最も大切なセオリーをこの映画に美事に生かしている。

まず凸凹のある模様ガラスを通してキャバレー「キット・キャット・クラブ」の内部を次第に見せて行くファースト・シーン，そこでいきなりジョエル・グレイの扮するキャバレーの司会者の歌う「ウィルコンメン」(ようこそみなさま）の場面，これはミュージカル・ナンバーというよりもリアルなキャバレーの歌であり，天井の低い地下室のキャバレーに立ちこめるタバコの煙，舞台で踊る女の脂粉の香りを生々しく感じさせる。しかもこの歌の間にイギリスから列車でベルリンに着いたヒーロー，ブライアン(マイケル・ヨーク）を紹介してしまう。この歌はこの町にある期待を抱いてやってきたブライアンへの歓迎の歌にもなっているという演出である。

そのブライアンとこの物語のヒロイン，サリー・ボウルズ（ライザ・ミネリ）との下宿の出会いがあった後に，サリーがキャバレーの舞台で歌う「私の彼氏」にしてもそのカット割りの小気味のよさもフォッシーの感覚のよさを示している。

こんな調子で書き出したらいくらでも長くなってしまうが，この映画でとくにおもしろいのはフォッシーがナチス以前のドイツを風俗画的に実にうまく描いているところである。

第一次大戦に敗戦を喫して以来，経済的にも政治的にも混乱が続き，左右勢力の対立，インフレ，社会的な不安のなかで無気力な享楽生活を追う人々が描き出していた異常な風俗をちょうど当時の有名な風刺画家ゲオルク・グロッスの絵を思い出させるような調子で美事に再現している。キャバレーの舞台で演奏しているデブ女たちのジャズ・バンド，女のような化粧，物ごしで歌うオカマ的な司会者，客席を埋めている紳士淑女？の点描，こういうところにもこの映画のうまさ，よさがある。

こういうワキ役や仕出しのマスクのよさは，この映画がハリウッドでなく実際に外景，セットともにミュンヘンで撮影しなかったら得られなかったよさだとおもう。

この映画の最大の話題になったジュディ・ガーランドの忘れ形見，ライザ・ミネリについてはあまり書かなくてよろしいということだったので何も書かなかったが，サリー・ボウルズを演じたライザ・ミネリは，この役のために生まれてきたような適役であり，歌，踊り，演技ともにおふくろさんよりはるかにいい素質をみせている。ちかごろの若い歌手には求められないヴォードヴィル的な歌い方（マイクなどなかった時代にナマの声で聴衆を圧倒するような歌い方）をこの若いライザが身につけているのに驚かされた。ナチスの暴力的な政治力が刻々とユダヤ人に迫りつつあった1931年のベルリンのデスペレイトなムードのなかでもまれながら寄ってくる男に身をまかせる踊り子サリーが若いイギリスの作家ブライアンには純情な乙女心を呼び戻して悩むのだが，このライザ・ミネリは来年のアカデミー賞の有力候補になりそうである。

とにかくストーリーを追うよりも，絵画を見るように感覚的に見てたのしむべき映画だということを強調しておきたい。

CABARET

















Miss Show Business—LIZA MINNELLI!

“ショウ・ビジネス界の女王” ライザ・ミネリ!

大歌手ジュディー・ガーランドと名映画監督ヴィンセント・ミネリの間にできた一粒ダネ，ライザ・ミネリ!シェイクスピアが創造した変幻自在の架空の動物“エーリアル”にそっくりだと言われているライザ・ミネリ!バンビのような大きな瞳をクリクリさせて絶唱するライザ・ミネリ!日本のファンがシビレを切らして待ち焦がれていた“ミス・ショー・ビジネス”のライザ・ミネリが遂に日本へ上陸しました。

1 ライザ・ミネリのおいたち

ライザ・ミネリは1946年，映画監督ヴィンセント・ミネリと歌手ジュディー・ガーランドとの間に生まれ，小さな頃から波乱に富んだ生活を送ってきました。

スターのハリウッド生活(ライフ)というものは一般大衆から考えると，まさに想像を絶するものがありますが，スターの娘だったライザ・ミネリにしてもその例外ではありません。子供たちのバースデー・パーティーには，親たちは張り合うようにして大金を注ぎ込み，ドッグ・ショーや手品師を招んだり，電気仕掛けの人工滝を用意したり，子供にとっては「物欲すなわち現実」という夢の少ない生活でした。親たちがパーティーに招く客といえば，誰もが有名なスターばかり，親たちの仕事場へ行ってもやはりスターばかり……そんな境遇に育ったライザが小さい頃から大人びていたとしても，誰も彼女を責めることはできなかったでしょう。フレッド・アステア，シド・チャリシー，ジーン・ケリー，ローレン・バコール，ハンフリー・ボガード，フランク・シナトラ，マリリン・モンロー――こんなスターたちと，8，9歳の頃から対等(?)に話し合ってきたライザは落ち目になった母ジュディーに代って，10歳そこそこから一家を切り回すようになりました。召使いを面接して雇ったり，学校まで妹や弟（このふたりはジュディーとシド・ラフトの間に生まれた子供）を送り迎えしたり，悩む母の相談相手をつとめたりもしました。この間，ガーランド一家はカリフォルニアからニューヨークへ，ニューヨークからロンドンへと移り，サンタ・モニカの安ホテルに住んだこともありました。それまで，母と一緒に何回かブロードウェイの舞台を踏んでいたライザですが，彼女がショー・ビジネスの世界へ本格的に入ったのは1962年のことです。大スターの娘と言えども，ニューヨークのショー・ビジネス界は全く容赦しませんでした。仕事も貰えず，ホテルの部屋代にも困ったライザは衣裳を形に追い出され，今日はプラザ・ホテル前の石段で，明日はセントラル・パークで――そんな時もありました。どん底のライザに光明がさし始めたのはオフ・ブロードウェイ・ミュージカル“BEST FOOT FORWARD”再上演のキャストに選ばれてからでした。そして……

2 両親について

“ショー・ビジネスのファースト・レディー”と言われたジュディー・ガーランドとヴィンセント・ミネリが結ばれたのは1945年のことですが，この結婚はジュディーにとって2度目のものでした。(彼女は1941年，“ストリッパー”の大ヒットで知られる音楽家デビィッド・ローズと結婚していたのです)。1922年，芸能一家の子供として生まれたジュディーは小さい頃から姉たちと一緒に芸能界で活躍していました。その後，歌曲作家リュウ・ブラウンの勧めでハリウッドに移った彼女はMGM映画と契約し，1936年，「いつも日曜日には」（ディアナ・ダービン主演）で銀幕にデビューしました。ミュージカル・スターを夢見たジュディーは映画出演のかたわら，歌手のソフィー・タッカーに指導を受け，1939年，「オズの魔法使い」でアカデミー賞を獲得しました。この映画に使われて大ヒットとなった“Over the Rainbow”が

ジュディーのテーマになっていたことは余りにも有名な話です。ヴィンセント・ミネリとの結婚後も仕事を続け，1948年にはフレッド・アステアと共演で「イースター・パレード」を撮っています。

一方，上品で教養に溢れた父であるヴィンセント・ミネリは“ZIEGFELD FOLLIES”や“MEET MEIN ST. LOUIS”などの洗練されたミュージカル・フィルムを作っていました。ライザがスタジオのアイドルとしてチョコチョコ走り廻ったり，フレッド・アステアやジーン・ケリーからステップを教わったのもこの頃でした。

しかし，1951年，ふたりの愛に破局が訪れたのです――というのも，生来の気まぐれが顔を出したジュディーが仕事からホサレ，神経衰弱気味になっていたからでした。翌年，ジュディーはマネージャーのシド・ラフトと再婚し，1954年にはラフトの努力で映画「スター誕生」に主演して完全なカムバックに成功したのです。そして，その後はライヴ・コンサートに専念し，音楽史上にも残るような名演を何度か行ないましたが，1969年，睡眠薬の飲み過ぎが原因で，46歳の生涯に幕を下ろしました。ジュディーの死がライザを解放することになったのですから皮肉な話です。

3 ライザの芸歴

今日のライザ・ミネリが生まれたキッカケはオフ・ブロードウェイ・ミュージカル“BEST FOOT FORWARD”の再上演キャストに選ばれたことでしたが，この時のギャラは週34ドルでした――恐らく17か18歳の頃でしょう。“深い森の魔女”のように見えたというライザはブロードウェイのコーラス・ガールとなって，ビッグ・チャンスの到来を待つことにしました。ビッグ・チャンスは間もなくやって来ました――友人の紹介で，ミュージカル“FLORA, THE RED MENACE”の詩を書いたフレッド・エブに会うことができたのです。同ミュージカルの監督ジョージ・アボットの口添えで主役に抜擢されたライザは厳しいリハーサルにも耐え，その結果，1965年度トニー賞で最優秀ミュージカル女優賞を獲得しました。

“FLORA, THE RED MENACE”の公演を終えたライザはフレッド・エブと組んで，ナイトクラブの仕事を始めました。エブのショー構成はどうしてもジュディーの構成とダブリ勝ちでしたが，聴衆の好奇な目にもめげず，ライザはジュディのイメージに敢然と挑戦，見事にライザのイメージを定着させました。現在の彼女は，衰退の一途をたどり続ける高級ナイトクラブ界にあって，客席を一杯にできる実力を持った数少ない芸人のひとりにまで成長しました。ラス・ヴェガスのリヴィエラはライザに週6万ドルものギャラを払っているのです。リヴィエラが支払うギャラとしては，勿論，最高額です！ライザの活動はナイトクラブだけに止まってはいません。既に，彼女は「くちづけ」⑱という映画で銀幕界にデビューしていましたが，つい最近，「キャバレー」に主役で出演，ライザの本領を発揮した作品として，異常なほどの注目を集めています。その他に「THE GOOD OLD SUMMERTIME CHARLIE BUBBLES」（アルバート・フィニー監督）⑲

4 ライザの“ステージ”

今年の1月，ライザはマイアミ・ビーチのイーデン・ロック・ホテルでショーを行ないましたが，その時の模様を御紹介しましょう（といっても，ここ2年間，ずっとこの構成でやっているのですが）。

まずはオープニングから……絹でつくったさび色のチューブ型ドレス（両サイドは太腿いっぱいまで割れている）を着てステージに現われたライザは自己紹介もしないで，のっけから「もし，貴方が私の心を読めたら……」と歌い始め，徐々にクライマックスへと盛り上げて行き，「ラ，ラ，ラ」で次第にフェイド・アウトするのです。乗り始めたライザはスタンドからマイクを外し，片肢を曲げたまま，頭を後方に垂れるのですが，見ていると，足下から身体全体にメロディーが広がって行くような感じです。このセクシーでドラマチックなパフォーマンスには食事をしている人さえも手を休めて見とれてしまうのです。

ステージのソデに駈け込んだライザは1分もすると，インディアン娘のコスチュームで登場，同時に，背後のせりには4人組ロック・ダンサーズ，アメリカン・サンシャインも姿を見せます。ヴォーカルはブルースからロックに変わるのですが，衣裳の着替え同様，スムーズで非の打ちどころもありません。ステージ狭しと踊り廻るライザの肌には汗が滲んで，長いつけまつげもやっとついているような状態です。「ここはとてもホットね，魅力的に見せるのも大切だけど，目が見えなくなっちゃ……」などと話しかけながら，つけまつげを外してしまうのですが，これがまた，抱き締めたくなるほど可愛いしぐさなのです。

次は黒の山高帽に，黒いヴェルヴェットのニッカー・スーツで登場するのですが，この姿はハイ・ハットに黒のジャケットとタイツを着けた，母親ジュディーの姿を彷彿とさせるのです。ここでライザはA. ジョルソンの名曲“My Mammy”を歌いますが，これはジュディーの名唱“Swanee”にも匹敵するものです。そして，ライザはありったけの気力を振り絞って，フィナーレを乗り切るのです――強烈さと同時に，ノスタルジアが一杯溢れた見事なフィナレーです。これがライザのステージなのです。

5 ライザのプライベート・タイム

一見，無造作に見えるがオシャレのセンスは相当なもので，パリ好みのシックな雰囲気とヤンキー・ガールの明るさをたくみにマッチさせている。料理が得意で，大変な犬好き。

1967年にオーストラリア生まれの作曲家でシンガーのピーター・アレンと結婚したが1971年に別れ，その後，バンドのギタリスト，レックス・クレーマーと深い仲になり，現在の恋人は，喜劇女優ルシル・ボールの息子デジ・アーナス・ジュニアで，彼の新作『マルコ』のロケを追って来日したばかりである。2人の結婚は時間の問題とされているが，恋にも全身でアタックするライザの将来は，容易にはうかがい知れぬものがある。

（資料提供・キングレコード）

＊スター・メモ



マイケル・ヨーク
MICHAEL YORK

目下，売り出しの英国出身の人気スター。幅ひろい役柄をこなして前途洋々たる大器である。

1942年イギリスのフルマー生れ。パブリック・スクール在学中から演劇に熱を上げ，16歳でマイケル・クロフトの国民青年劇場に参加，国内からヨーロッパ各地を巡業した。後にオックスフォード大学に入り，そこでドラマ・ソサイェティの1員となりシェークスピア劇に卓越した才能を見せた。また，他の劇団で現代劇の修業もつみかさねた。

マスター・オブ・アーツの学位をとり優等生として大学を卒業。ダンディー・レパートリー劇団に加わったがやがて，オーディションをうけナショナル・シアターの劇団員となった。その時の審査員にサー・ローレンス・オリビエが加わっていた。

このシェークスピア劇の実績を高く評価した1人に，イタリアの鬼才フランコ・ゼフィレッリ監督がいる。彼はリズ＝バートンの『じゃじゃ馬ならし』に抜てきしたあとジョセフ・ロージーの相談をうけてその新作『できごと』の貴族青年の役に推せん，マイケル・ヨークは一躍して批評家の賛辞をあびるスターとなった。またゼフィレッリ監督の名作『ロミオとジュリエット』ではティボルト，『アレキサンドリア物語』では若き主人公を演じて力強い足跡をしるしている。

1968年，写真家で，元『グラマー・マガジン』誌の編集長だった才女パトリシア・マッカラムと結婚した。

《作品》赤と黒。じゃじゃ馬ならし。できごと。ロミオとジュリエット。アレキサンドリア物語。アルフレッド大王。

1933年生まれ。コメディアン，ミッキー・カーツの息子。10歳のときから舞台に立ち，ハイスクール在学中，すでにナイトクラブで唄い，踊り，物まね，パントマイムなどを演じた。学校卒業後，最初はラジオ，やがてＴＶタレントとして活躍した。映画は53年，ミュージカルABOUT FACEにデビューした。61年，「９月になれば」に出演している。

その後のＴＶショーでの活躍はめざましく，数々のスリラー，西部劇，ロックミュージカルに出演した。

また，ニューヨーク・ネイバーフッド・フレイハウスでサンフォード・アイスターに演技指導を受けた彼は，舞台に立ち，67年に「キャバレー」でブロードウェイ・ミュージカル最優秀助演者としてアントアネット・ペリー賞（トニー賞）を，69年には「ジョージM」で最優秀男優賞にノミネートされ，名実ともにブロードウェイ最高のミュージカル俳優となった。

夫人は元女優ジョー・ワイルダーで，２児がある。目下，ニューヨーク・セントラル・パーク西アパートに住んでいる。

JOEL GREY
ジョエル・グレイ





ヘルムート・グリーム
HELMUT GRIEM

ドイツのハンブルグ生まれ。初め作家志望で，ハンブルグ大学で哲学と文学を専攻したが，家が貧しかったので色々とアルバイトをした。その一つは日本流に言えば「お座敷劇団」とでも言った演劇グループに入ったことで，これは金持の邸に招かれてそこで芝居をするのであった。ひと晩出演して礼金20マルク（1540円）位になったと彼は述懐している。

巡業中にルベック劇場の支配人に認められ舞台に立ってから，やがてナショナル劇場の一員となり，シェークスピア劇など古典から現代劇に至る色々な舞台をふみ，またモスクワ，レニングラード，ベルグラード，アムステルダム，パリ，ベニス，ヘルシンキ等を巡業し，ベルグラード演劇フェスティバルでは最優秀男優賞を獲得した。ベルリン・アカデミーから最優秀男優賞を贈られたのは68年であった。ＴＶにも数多くの作品があり，映画俳優として売り出したのは70年，ルキノ・ビスコンティ監督の「地獄に墜ちた勇者ども」に出演してからである。

《作品》マッケンジー脱出作戦。

ドイツのミュンヘン生まれ。10歳のときから演技を学び，ＴＶを振出しに芸能界に入った。目下ドイツのＴＶ界の最高人気者で，最近作「警部」はヒット・シリーズとして視聴者の人気を集めている。

舞台俳優としての経験も浅くなく，シェークスピア劇はもちろん，「われらの町」のような近代劇にも出演している。映画にも子供の頃から出演しており，最近作としては「栄光への賭け」がある。

独身で，ミュンヘンに住んでいる。

FRITZ WEPPER
フリッツ・ベッパー





マリサ・ベレンソン
MARISA BERENSON

パリ出身で，今は亡き父親はある船会社の重役であった。ニューヨークへ渡ってファッション・モデルとなり，アメリカではヴォーグ誌，ドイツではスターン誌にその美しい容姿が紹介された。彼女をモデルに仕立てたのはファッション界で名を売った祖母のエルサ・シアパレリ・ベレンソンであった。アメリカのトップ・ファッション評論家ユージェニア・シェパードが彼女を最高のファッション・モデルに選んだこともあった。

だが，彼女は俳優を志し，ウィン・ハンドマンの演劇学校，アクターズ・スタジオ等で演技を学んだ。この映画がデビューである。

語学が達者で，英語の他に，フランス語，ドイツ語，イタリア語をマスターしている。



その他の出演者

★この映画にデビューしたキット・カット・クラブのジャズ・コンボは総勢6名で全部女性である。彼女たちの出身地は西ドイツとオーストリアで，名前と楽器を紹介すれば，ピアノはクリスチン・ハウア，ドラムはアンジェリカ・ベラン，サキソホンとクラリネットはブリギッテ・スタインベッカー，トランペットはマリアンヌ・フレミング，トロンボンはゲルトルード・アントレッター，バンジョーはウンディネ・フレーリッヒと言ったところで，この中には70年の冬，ウィーンの舞台で上演された「キャバレー」に出演した人たちもいる。

★女の姿体を模索する有名なリッキー・ルネーもこの映画に少なからざる興をそえている。ルネーはアメリカ生れ。ジュエル・ボックス・レビュー団の一員で，すでにアメリカ50州のうち38州を巡業している。国外巡業はカナダ，南米，フランス，ドイツ，スエーデン，デンマーク，イタリア，オーストリア等の大都市にも及んでいる。最近イギリスに渡り，ロンドンの劇場やナイトクラブに出演し好評を呼んだ。

★以上の外に手品師アロイス・エデンホーファー，曲芸師アネマリ・アーバン，女レスラーのユッタ・ワルドブルンナーとリーゼ・ロッテ・リングル，腹話術師ゲルハルト・メルツたち芸人を集めている。これはドイツの配役監督レナテ・ニュークル女史の仕事であったが，女史は女レスラーを探すのが一番骨が折れたと言っている。





製作こぼればなし



★この映画のロケはドイツの各地で行われた。ミュンヘンでは絵のような美しいイギリス・ガーデンとミュンヘンのビルと市街がカメラにおさめられた。

映画の中で最も重要なシークェンスの一つは，デンマーク国境に近いルベック市の停車場で撮影された。この停車場は第二次大戦のとき爆撃をまぬがれ，ガラスのドームも昔のまま残っている。だが現在は照明がモダンとなり，ケバケバしい構内にポスターなどを貼った掲示板や売店が沢山あるので，それを一時とり除いて昔の姿を再現した。当時の蒸気機関車も２台使用した。

ロケは北ドイツのシュレスビグ・ホルスタイン郡とユーティンの湖水地帯においても行われ，有名なオルデンバーグ侯爵の城の内部はもちろん，屋外の美しい風景もカメラにおさめられた。この城は今でも人が住めば住めるが，現在は私有の博物館として保存されている。昔ロシアのカテリナ女帝が一時住んだこともある由緒深い城である。

この古城を映画撮影に利用することを許されたのは今度が初めてのことで，城内の貴重な調度品も小道具として使用された。大晩餐会のシーンも，城内の大サロンで撮影されたが，そこのすばらしい暖炉とさん然ときらめくシャンデリアは見物であるといわれる。

ロケも終りに近づくと，カメラの焦点は，もっぱらクリストファー・イシャーウッドの短編集に出て来る街や有名な場所に向けられた。それらの中で最も有名なのは1695年に建てられたカーロッテンバーグ宮殿である。この宮殿の広大な庭園内にルイゼ女王と皇帝フリードリッヒ・ウィルヘルム三世の墓所がある。庭園には美しい小径や花園や泉水がいたるところにある。

カーロッテンバークの裏側からベルリンの広大なるティーアガルテンが拡がっているが，そこは広い花園で幅広い散歩道が通じている。映画の中に出てくる30年にベルリンで行われた思想デモのシーンはここで撮影された。またマリサ・ベレンソンがフリッツ・ベッパーと結婚式をあげるユダヤ教会は，西ベルリンにある。

以上の外にベルリンではダーレムの







高級住宅街から，サビニ広場の近くにある狭い路地もカメラにおさめられた。キット・カット・クラブの表の風景は，サビニ広場の一部である。

★衣裳デザイナーのシャーロット・フレミングは現代ドイツ有数のデザイナーで，ライザ・ミネリの衣裳のデザイナーを担当した。彼女はベルリン，ウィーン，ミュンヘンを初め他のヨーロッパ各国の舞台，映画，ＴＶの衣裳デザイナーとして活躍している。

★監督ボブ・フォッシーは，この映画を撮影中，ドイツのある取材記者に映画演出について次のように語った。

「私は映画の可能性は無限であると思う。限界があるのは監督の頭である。私のこれまでの経歴をふり返って見て感じられることは，私が欲求不満の画家とでも言った存在であったことだ，カメラが初めて私に多少“絵を描く”チャンスを与えてくれたと思う。

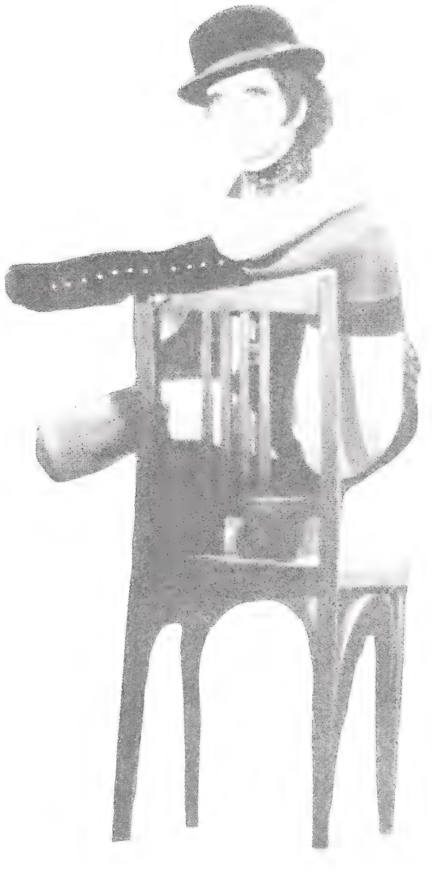
私が初めてハリウッドへ来たとき，フレッド・アステアやジーン・ケリーの様な名ダンサーになる希望に燃えていたが，やがて仕事に限界があることがわかったので，ニューヨーク行きを志した。」

フォッシーはミュージカルの流行が映画から舞台へ移行したことを知ったからであった。ニューヨークに出た彼が振付師として，また演出家として舞台に貢献した功績はきわめて大きい。映画の可能性は無限であると説く彼はまた次の様に言っている。

「ダンスは環境，もしくは雰囲気，もしくは特定の場所，もしくは人物の性格を示すべきである。ダンスは，また，特殊の感情やある瞬間のフィーリングを表現できる。しかも娯楽性をもたせ，美しく仕上げることだ。

見て美しく観客に感動を与えるものでなければならない。

私は将来もダンスやミュージックやパントマイムを織りこんだ動きのある映画を作りたい。セリフはなしにするか，最少限にとどめるつもりである。いずれにしても楽しい映画を作らなくてはならぬ」





SYNOPSIS

The setting is Berlin in the early 1930's.

As the film begins, the Master of Ceremonies (JOEL GREY), wearing white make-up with rouged lips and patent leather hair is singing and dancing "Willkommen," welcoming patrons to the cabaret called the Kit Kat Klub. He urges the customers to leave their problems outside — once in the cabaret all troubles are gone.

At the same time, British language student Brian Roberts (MICHAEL YORK) arrives in Berlin, and rents a room at the Schneider rooming house. His next door neighbor is Sally Bowles (LIZA MINNELLI), a completely impractical romanticist, who sings at the Kit Kat Klub as a stepping stone to movie stardom for which she yearns. Brian visits her at the club and watches her sing "Mein Herr". They spend much time together, and become romantically involved with each other. Brian becomes aware of the Nazi swastika and graffiti on the Berlin streets, but looks away from the danger signals to enjoy his leisure time with Sally. They are unaware that Nazi hoodlums are beating the host of the Kit Kat Klub for ejecting them from the club. This brutality is contrasted with the gay musical number "Slapdance," performed by the Master of Ceremonies and cabaret dancers.

Brian earns a living in Berlin by giving English lessons. His two pupils are Fritz Wendel (FRITZ WEPPER), a friend of Sally's, and Natalia Landauer (MARISA BERENSON), a strikingly beautiful, young lady whose father owns the big department store in the city.

Sally is extremely pleased about her relationship with Brian, and in the cabaret sings "Maybe This Time" to him. Natalia confides to Sally that Fritz has



declared his love for her, and that she reciprocates his love. However, with the Nazis becoming more dominant, she refuses to marry him because she is Jewish and he is not. They remain apart and miserable until Brian prods Fritz into making a dramatic revelation to Natalia.

Sally's romantic life has a new entanglement after meeting wealthy and handsome Baron Maximilian von Heune (HELMUT GRIEM). Sally knows "Money" when she sees him and the cabaret Master of Ceremonies sings that song with her. Max lavishes gifts on both Sally and Brian as we see the Master of Ceremonies singing "Two Ladies."

Brian and Sally weekend at Max's country castle. They stop at a country beer garden where a young German begins the song "Tomorrow Belongs to Me." As the music becomes stronger and more militant, almost everyone joins in the singing.

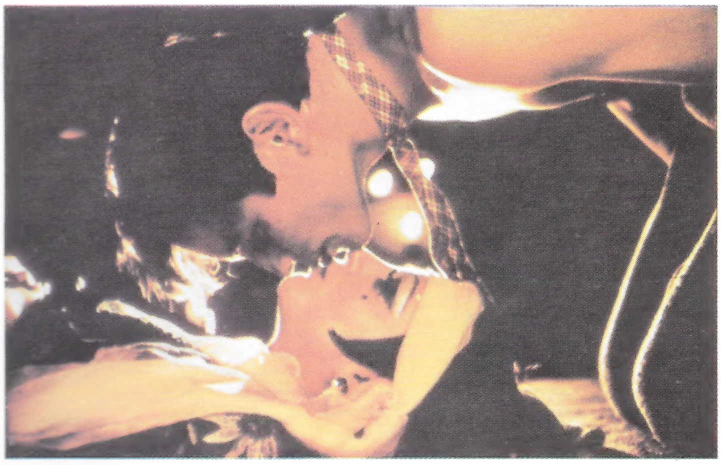
Back at the rooming house Sally admits her relationship with Max. Brian, in a rage, storms out, picks a fight with two Nazis and returns to his room badly beaten. Sally reveals to Brian that she is going to have a baby, but she's not sure who is the father of the child. Brian assures her he wants the baby, but Sally ultimately has an abortion.

At the Kit Kat Klub, the Master of Cermonies sings a satirical song, "If You Could See Her", with an unusual female companion.

Brian decides it's time for him to leave Berlin. He and Sally embrace for the last time. In the club she sings "Cabaret," and the lyric typifies the philosophy of the times.

Life is a cabaret, old chum, Come to the Cabaret..."









CABARET

昭和47年 8 月18日印刷
昭和47年 8 月19日発行 ©

発行所　東京都千代田区有楽町１ノ14　東宝株式会社事業部
発行者　東京都千代田区有楽町１ノ14　内田和也
発行権者　東京都港区赤坂１－11－45ケンリック極東株式会社
印刷所　東京都港区赤坂１－４－４　成旺印刷株式会社

LIZA MINNELLI
in
CABARET
and
BOB FOSSE
MICHAEL YORK





STAFF

Produced by .... CY FEUER
Directed by .... BOB FOSSE
Screenplay by .... JAY ALLEN
Based on the Musical Play "CABARET"
Book by .... JOE MASTEROFF
Music by .... JOHN KANDER
Lyrics by .... FRED EBB
Based on the Play by .... JOHN VAN DRUTEN
and Stories by .... CHRISTOPHER ISHERWOOD
Dances and Musical Numbers staged by
.... BOB FOSSE
Musical Direction and Orchestrations by
.... RALPH BURNS
Additional Songs:
Music by .... JOHN KANDER
Lyrics by .... FRED EBB
Photographed by .... GEOFFREY UNSWORTH
Edited by .... DAVID BRETHERTON

CAST

Sally Bowles .... LIZA MINNELLI
Brian Roberts .... MICHAEL YORK
Maximilian von Heune .... HELMUT GRIEM
Master of Ceremonies .... JOEL GREY
Fritz Wendel .... FRITZ WEPPER
Natalia Landauer .... MARISA BERENSON
Fraulein Scheider
.... ELISABETH NEUMANN-VIERTEL
Fraulein Kost .... HELEN VITA
Fraulein Mayr
.... SIGRID VON RICHTHOFEN

CABARET

Distributed by
20th Century-Fox

